

NPO法人

日本産漆を支援する

壺木呂の会

I C H I K I R O

会報
第12号 / 2016年4月発行



「目次」

- 2 一 二〇一五年度事業報告
- 3 一 はじめに
壺木呂の会を支援して頂いている皆様に
理事長 本間幸夫
- 5 一 第十五回クロメ会と奥久慈うるしと壺木呂の会展
賛助会員 磯井美葉
- 6 一 漆サミット二〇一五
正会員 徳山やよい 賛助会員 磯井美葉
- 8 一 石川県山中漆苗植栽会
正会員 徳山やよい
- 9 一 鎌倉彫協同組合奥久慈植栽会
正会員 徳山やよい
- 10 一 漆掻きに臨む
星野章
- 12 一 二〇一六年度事業予定／お知らせ

壺木呂の会を

支援頂いている皆様に

理事長 本間幸夫

皆様、いつも会の活動にご支援を頂きましてありがとうございます。皆様のご支援でNPO法人として会の活動が加速しています。

今年度よりWEBサイトの充実と、会報誌面を一新し年に複数回発行して多くの会員に情報を共有して頂けるようになります。

私たちの日常は携帯電話や多くの電子機器、便利な生活家電に取り巻かれて、文化的なものとの区別が曖昧になり、時には同じだと思ってしまう方も多く見られます。

すぐくカッコイイと云われるものに多くの方が、共感し胸を躍らせるように、世の中に誘導されているような気がしています。私もその誘導されやすい一人で、なかなか周りと共に生きていく上で、切り離しにくくなっています。文明という便利なツールは時代と共に進歩は消え又新しく出ては消えていくものです。しかしながら文化は我々のそばにずっと寄り添いゆっくり回転しながらも、私達の心を豊に柔らかくしてくれます。

縄文時代から我々の祖先たちが大切にしてきた漆文化を正しく後世に継承してもらいたいと思います。

さて昨年の文科省通達により日本産漆の植栽は各地で大きく前進することになると思います。約二十年にわたり多くの実行委員が地道な活動を積み重ね、いろいろな場で日本産漆の存続の重要性を話し、活動してまいりました。

壺木呂の会が進めてきた幾つかの活動のうち漆の植栽は大きな成果を持ちはじめたと考えています。

二〇〇九年十二月小西美術工芸社の前会長・故原登様に壺木呂の会で植栽したばかりの畑の写真を見て頂く機会がありました。理想的な環境の下での漆畑植栽に大変興味を持って頂き、自社の漆畑を奥久慈で少しずつ広げたい旨の相談があり毎年奥久慈で植栽を進めてきました。現在は社長がデービッド・アトキンソン氏に代わりましたが、引き続きその作業が継続して行われています。



2011年4月1日 震災直後でしたが、壺木呂の会と小西美術工芸社、地元の皆様と協同で植栽しました

【2015年度事業報告】

- | | | |
|-------|-----------|--------------------------|
| 2015年 | 3月29日 | 第6次見本林植栽（茨城県常陸太田市） |
| | 5月17日 | 総会 |
| | 6月～12月 | 漆液の仕分け・頒布 |
| | 9月12日、13日 | クロメ会 |
| | 9月12日～23日 | 奥久慈うるしと壺木呂の会展（常陸太田市梅津会館） |
| | 12月4日～6日 | 漆サミット2015を後援・参加 |
| 2016年 | 3月26日、27日 | 山中漆苗植栽会（石川県山中温泉菅谷町） |
| | 3月31日 | 鎌倉彫協同組合奥久慈植栽会（茨城県常陸大宮市） |

皆様もご承知のように、下村前文部大臣とデービッド・アトキンソン氏の話し合いから、日本産漆に係わる最近の大きな流れが起きてきました。

勿論その中には問題な部分も多くあると思いますが、しかしながら今まで漆を採っていても生活が成り立たず、後継者や漆の木も激減してきたことが、良い方向に大きく変わる可能性が出てきました。

私たちの活動は、一般の方と漆関係者による民間だけの支援で成り立っています。

特に一般の皆様が参加する賛助会員による貢献は目を見張るものがあり、本当に敬服しているところ です。

今後も会の柱である左の活動を進めて参ります。

- 日本産漆の活用のための正会員への漆頒布事業。
- 多くの塗り手がお互いに学び研究するクロメ会。
- 一般の皆様には日本産漆の良さを広める展覧会と講演活動。
- 他地域との相互協力の一環として苗木支援と植栽協力。
- 会員のための奥久慈見本林の造成。(現在第六次見本林)
- 財政基盤充実のため「漆の木オーナー制度」の充実と今後オーナー認定証を作る。
- 今年度理事会によって承認されました「優良品種の育成支援」と「漆掻き鎌の独自開発」



2012年12月 東京の刃物屋さん和二戸市の方に会入りお手伝いをして作られた漆掻き鎌

第十五回クロメ会と

奥久慈うるしと壱木呂の会展

賛助会員 磯井美葉

今年のクロメ会は、九月十二日(土)、十三日(日)の二日間で、私は東京から正会員の竹内さんのお車に同乗させて頂き、参加しました。

私自身は漆を塗らないので、一日目は皆さんのクロメ作業を眺めていることが多いのですが、深い艶の漆液が攪拌されている様子や、何とも言えない色のクロメ桶などを見ているだけで楽しいです。少しでもクロメ作業をやらせて頂いたのも、とても興味深い経験でした。日光の中で、桶に入った漆液を無心にすくって拵げていると、漆液がとても愛おしく思えます。

今年は、梨地漆の精製もされました。梨地の漆器は私もとても好きですが、手間のかかるものだなあとあらためて思いました。

また、今年もうるし染めがありました。皆さんシャツやスカーフなど、思い思いのものを染めておられ、素敵な作品ばかりでした。

また、今年とても楽しみにしていたのは、壱木呂の会が、常陸太田市の市街中心部にある梅津会館という古くて素敵な建物の中で、NPO法人「結」の方たち、奥久慈うるし振興会の方たちとともに、「奥久慈うるしと壱木呂の会展」を開催し、十三日にそちらの見学も組み込まれていたことでした。

梅津会館は、もともと、地元の実業家梅津福次郎氏の寄付で、太田町役場として建てられ、現在は

常陸太田市郷土資料館とされています。NPO法人「結」は、コミュニティカフェやこの建物を残していく取り組みをされています。

十三日には、国立歴史民俗博物館准教授の工藤雄一郎先生による「漆を使いこなした縄文人」の講演と、会津の佐藤達夫氏、東京の野口洋子氏による漆芸のワークショップも行われ、一般の来訪者の方々も含めて大勢の方が集まりました。工藤先生のお話は、昨年のクロメ会でもお聞きし、その後漆サミットでもお聞きしているのですが、何度聞いても興味深く、また、先生の紹介してくださる縄文漆の写真も魅力的で、引き込まれます。ワークショップでは、佐藤達夫さんが蒔絵の、野口洋子さんが乾漆の器づくりの実演をされ、いろんな方が興味深そうに見入っていました。野口洋子さんが、奥久慈うるしは細かいところを削つたりするときにすつきり削れて、作っていて気分がいいとおっしゃったのが印象的でした。

会場ギャラリーでは、壱木呂の会や奥久慈うるし振興会の方々の作品も展示販売されました。特に、奥久慈産漆生産組合の神長さんや、漆掻きの木村さんの素敵な作品を拝見できたのは嬉しかったです。しかも、奥久慈うるしを塗った作品なのにとっても安く思わずいろいろ買ってしまいました。

これらの活動を進めるため、今後より多くの会員の協力を頂きたいと考えています。現在、若い方々でお手伝いをして下さる方を募集していますので、ご興味ある方は非会員でも全く問題ありませんので、是非ご連絡、ご紹介下さいますようお願い申し上げます。

新たに特別会員という制度が作られました。その初代特別会員として北鎌倉・東慶寺の井上米輝子様が理事会・実行委員会で承認されたことを報告させていただきます。

井上様はご承知の方も多くいらっしゃると思いますが、東慶寺(駆け込み寺としても有名です)を活動の中心に多くの文化事業に積極的に取り組まれ、特に漆文化や和紙文化などの衰退に心を痛め、その復興にご尽力なさっています。又地元でも「鎌倉彫を考える会」の会長としても活躍なさっています。

井上様はすでに賛助会員でしたが、今後特別会員として議決権を持ち会の活動、運営やその他にご指導を頂こうと考えています。

今後とも皆様のお力添えを頂きますよう、心よりお願い申し上げます。



クロメ会：今回は梨子地漆に挑戦しました。



野口洋子氏による作品解説



工藤雄一郎氏による講演

第七回漆サミットは十二月四日(金)から六日(日)まで開催されました。

初日に明治大学リバティタワーで行われた重要無形文化財保持者 室瀬和美氏の基調講演「文化財修復および制作における国産漆の活用」とパネルディスカッション「文化財建造物への国産漆一〇〇%利用に向けて」を聞かせていただきました。

室瀬氏のお話の中で国産漆の特徴として接着力の強さ、硬化表面の硬さ、湿度環境と硬化、精製漆の性質(肉持ち、透明度)を挙げておられました。杓木呂の会の漆を分けて頂いているものとして納得できることでした。

海外との修理のやり方の違い、粘り強く説明されて漆で作った物は漆で直すとの修理理論を定着させられたのは大変良かったと思います。

縄文時代から漆の接着力を利用して壊れたものをつないで育んできた金継ぎの文化の中で、茶道の唐物茶入れ、茶碗の直し方の違いのお話(茶入れは分からない様に、茶碗は分かる様に)は金継ぎから漆に入ったものとして大変興味深く伺いました。

パネルディスカッションでは、文化庁の清永洋平氏「国宝・重要文化財(建造物)における国産漆の使用推進について」、林野庁の長江良明氏「生漆の生産について」、九州大学の渡辺敦史氏「ウルシの優



沈金ワークショップの様子

良個体選抜に向けて」、杓木呂の会の本間幸夫氏「国産漆生産における問題と取り組み」、小西漆工芸社の岩本元氏の「建造物修理の漆について」のお話があり最後に森林総合研究所の田端雅進氏の司会で意見交換がありました。

驚く事あり、なるほどと思う事あり、いろいろなお話が伺えました。国産良質材の確保、法律、補助

国立歴史民俗博物館の工藤雄一郎氏、東村山ふるさと歴史館の千葉敏朗氏からは、縄文遺跡の出土品を豊富な写真とともに、縄文時代の漆利用が非常に洗練されていたこと、日本の漆の起源に関する見解等が紹介されました。焼き付けの手法が使われていたらしいことは驚きでした。

午後の講演は「漆文化と技術」として、ウルシの資源管理・利用や、漆掻き・産地の現状が紹介されました。森林総合研究所の田端雅進氏からは、木のDNAにより取れる樹液の量に違いがあること、木の病気と予防の紹介がありました。

漆掻きの竹内義浩氏からは、初辺、盛辺や裏目掻きなど、季節ごとの漆の取り方の紹介がありました。岩手県二戸市の内田美央子氏は、蠟や石けんなどさまざまな漆利用や、浄法寺の生産組合の現状を紹介されました。

京都市産業技術研究所の大藪泰氏は、漆の精製法や、混ぜるものによっていろいろな用途に使えること、明治大学の宮腰哲雄氏からは、乾きの遅い漆をうまく利用するためのブレンドの研究等が紹介されました。

講演会の隣の会場では、終日ポスター発表が行われ、三十九の展示がありました。杓木呂の会の活動も紹介されたほか、各種の漆器の分析やアジアの漆の特徴、漆器や樹液の成分分析等もありました。また、漆塗りの糸による織物や、インクジェットによる漆塗り手法の研究では、実物の展示もあり、とても興味深かったです。

午後の講演と同時進行で、沈金のワークショップが行われ、楕円形の黒塗りの台に、参加者の方が思い思いにデザインを彫り、講師の先生方が沈金を施して、その場で持ち帰ることができました。素敵な作品がたくさんありました。

三日目は、日光東照宮の修復現場の見学会が開催されました。



日光東照宮修復現場の見学

金、各省庁間の連携、質量共に優良な漆の選抜、人手、後継者、価格の問題、塗りの道具と技術の継承など、国産漆一〇〇%使用にはさまざまな問題がある事が良くわかりました。いずれも時間がかなり簡単には行かない事ばかりですが、次の世代へ漆文化をつないでいく為に皆で協力してひとつひとつ地道に解決して行かなければならない事です。微力ながらまず自分出来る事は何かを考え行動しなければと思いを新たにしたい一日でした。

賛助会員 磯井美葉

五日・六日の二日間、参加いたしました。

五日 土曜日は、明治大学で講演会と沈金のワークショップが、六日 日曜日は、日光東照宮の修復現場の見学会が開催されました。

五日 午前は「縄文時代における接着・塗装材料としての漆」についての講演でした。

森林総合研究所の能代修一氏によれば、日本のウルシは野生化しないため、中国に天然分布していたものが渡来したのではないかと考えだそうです。東京大学の吉田邦夫氏は、ストロンチウム同位体濃度測定により、出土品の産地を調査しておられ、日本の縄文遺跡の漆製品は日本列島産のウルシによるものだそうです。

午前は日光社寺文化財保存会で実際に修復に携わっておられる佐藤則武氏の講演がありました。元和時代と寛永時代にそれぞれ造営された建物と、その塗装などが紹介されました。昭和の大修理では中国産漆と日本産漆のブレンドが使われていたようですが、平成の大修理の作業では、二〇〇七年から日本産漆を使っておられるそうです。

講演の後、昼食休憩をはさんで、一〇〇名近い参加者が三つのグループに分かれて、保存会の佐藤さん、大森さん、鈴木さんのご案内により、境内と修理の現場を見学しました。

特に、まさに修理作業が進行中の陽明門と本殿には、作業のための足場が上がらせて頂き、新しく塗り終えたところや、これから塗られるところを、手を伸ばせば触れることのできる距離で見せて頂くことができました。新しく塗られたばかりの龍などは、間近に見るとなお艶やかで、とてもきれいでした。文化財建造物の門の装飾や修理を目の前で見る経験などまったく初めてのことで、杓木呂の会のおかげで何という役得を頂いたかと感激しました。

寒い冬の季節の中で、屋外の修復作業となり、もう少しすると雪も多くなるとのことでした。現場は大きなビニールで囲われ、暖房器具も使っておりますが、やはり底冷えがしますし、また、気候によって乾き方が変わってくるため作業にも工夫が必要とのこと、漆器の製作とはまた違ったご苦労があるのだなと思いました。

石川県山中漆苗植栽会

正会員 徳山やよい

二〇一六年三月二十六日から二泊二日で石川県の山中温泉菅谷町で行われた漆苗の植栽会に参加しました。

山中在住の杵木呂の会正会員の木地師辻新太郎先生がご自分の持ち山の杉を伐採しケヤキと漆を植林されるので杵木呂の会で苗木を支援しました。

当日東京から北陸新幹線かがやきで金沢経由加賀温泉駅へ、辻先生と工房のスタッフの方達に迎えて頂き、車で山中温泉へ、地元のおいしい蕎麦で昼食をすませ先生の工房で作業の身支度をして植栽地へ向かいました。

植栽地は道路の傍で便の良い所ですが、都会のものには想像を絶する斜面でみんな驚きました。神長組合長に植栽のやり方を伺い、二人一組でスコップとクワ、苗と目印のリボンを抱えて斜面に挑みました。辻先生のお手配で森林組合の方がすでに植える穴を掘って下さっていました。急斜面にたらの木やいばらが多く悪戦苦闘でした。けやきはすでに二〇〇本植林済みで、その傍らに漆の苗木二〇〇本植えました。良い木に育つようにと念じながら植えて来ました。なれない急斜面での作業でしたが転がり落ちる人も無く3時間ほどで植栽を終えることが出来ました。これから三年間は森林組合が下草刈りをするそうですがその後の手入れもご苦労だろうと思います。北陸新幹線の開通で東京から三時間半

掛からずに来ることが出来ますので。機会があればまた応援に伺いたいと思います。

植栽終了後は工房へ戻り着替え宿へ移動、温泉で疲れをいやし、混浴の露天風呂もあり体験された方も：夜は辻先生、上塗り師の清水さん、挽物轆轤研修所のスタッフの方、工房の方達とお食事をこじ緒して漆の話などで盛り上がり楽しい時間を過ごしました。

宿の歓迎看板がなんと「二キロの会様御二行」杵木呂の会の知名度をもっと上げねばなりません。もらって来て記念に集合写真をとりました。

翌日は伝産会館で漆器産業会館を見学、研修生の卒業の展示や轆轤の実演を見ることが出来ました。

神長組合長の「漆の植栽と注意点」本間先生の「日本産漆の現状」についてのお話があり意見交換が行われました。

昼食後は下地師田中育太郎さんの工房を見学させて頂きました。田中さんのへらさばきの見事に驚きました。研ぎの大変さにはあらためて納得でした。

その後希望者は辻先生の工房で轆轤の体験をさせて頂きました。一度はやってみたかったのでとても楽しんでいた体験でした。鉋をあてるとみるみる木地が形になって行きますが、自分でやると思ひ通りにならなくて、スタッフの方に手をとられ外側の形を作りました。体験は外側を削り、内側はスタッフの方が仕上げ拭き漆をして送って下さいますが、皆さん、自

鎌倉彫協同組合奥久慈植栽会

正会員 徳山やよい

二〇一六年三月三十一日奥久慈で鎌倉彫協同組合の漆の植栽が行われました。天候にも恵まれ鎌倉から二十三名の方が参加されました。

十時過ぎに奥久慈工房へバスで到着され小休止、本間先生、協同組合の後藤様、岩澤様のご挨拶、神長組合長、YUSの菊池会長の紹介のあと植栽地へ移動しました。

植栽地では偶然傍の畑に奥久慈漆生産組合の漆掻きの飛田さんがお弟子さんと漆の分根を植えておられるところに行き会い、見学させて頂きながらお話を伺えました。

神長組合長に植栽の仕方の注意を伺い、各自スコップを手に植栽を開始。植栽地は二カ所に分かれていましたが、どちらも元耕地だったので傾斜もなだらかで土も柔らかく、すでに立ててあった目印通り植栽しました。木が育った時に整然と美しく見えるように間隔と並びを考え組合長の方で目印をつけてありました。間隔が狭いと木が枝をのばせず、葉が広がらなくて成長を妨げるそうです。今の季節まだ芽吹いていない若い漆の林は木の肌が白く大変きれいです。

植栽を終えていつもお世話になる食堂「盛金」で昼食を頂きました。後藤様から「良い体験ができた」とご挨拶があり「伝統をつなぐ小さな一歩を踏み出した」とお話がありました。



鎌倉彫協同組合の皆様と一緒に



辻新太郎先生を囲んで

工芸の館にて轆轤体験

分で漆を塗るので木地のままで良いと言うと、なんと辻先生が仕上げの削りをして下さり持ち帰る事が出来ました。轆轤を体験された方々、作品が完成したらぜひ見せて下さい。

その後駅まで車で送って頂き金沢経由で帰京しました。

茨城での植栽しか参加したことがありませんでしたので山間地での植林の大変さを改めて認識しました。これからの手入れも大変だと思います。何をお手伝いできるか分かりませんがこれからも応援して行きたいと思っております。

神長組合長から植栽や分根に付いての話があり、植栽にはどのような場所が適しているか、分根はどう行かなどを伺いました。

本間先生からは奥久慈で漆植林を始めた経緯や管理の苦労、品質の改良、採る時期による漆の性質、国や県の方針、他産地の動向、動物の食害などのお話がありました。

昼食後は見本林、奥久慈工房のろくろや作業場、木地置場の見学をされ十六時頃帰路につかれました。

良いお天気で植栽されるには大変良い日でしたが、皆さん早朝に鎌倉からおいでになり、なれない作業でお疲れだったと思います。これが大切な始まりの一日と後藤様のお話がありました。植えて終わりではありません。これからの管理、手入れが大事です。日本産漆の生産の為にこれからも共に活動して頂ければと思います。

杵木呂の会の会員七名で植栽のあと漆の木のオーナープレートの紐の取り替え作業をしました。プレートをはける際細いステンレスの紐とコイルを使っていますが一部木の成長に伴って幹に食い込むものが出て来てしまいました。そのためポリプロピレンの紐に取り替えました。りっぱに成長した木が多くプレートを掛けた枝が上の方に伸び梯子を使つての作業となりました。紐が劣化してしまふと思われので数年後にはまた替えることになると思いますが木のさらなる成長が楽しみです。



昭和二十一年八月十八日生。二十歳から茶道に親しむ。漆芸家増村益城氏の指導もあり、趣味として茶碗等茶道具の修理を漆を用いて取り組む。一方、茶道具の制作を楽しむ。
平成十六年十一月「ぎやうり壺中天にて兄弟展」兄天街は刻字 龍崖（本人）は茶道具。

一 漆掻きへの興味

練馬に住んでいた漆芸家の増村益城氏が柏の方に引越され、自宅に伺った際、庭に漆の木を植えており、話の成り行きで、苗木を二本譲って頂いた。

山の南斜面を選び辺りの樹木を伐採し、間隔をあけて漆の木を植えた。

時々見回りをし、かつ肥料も与えたが周りの木々の根が広く張っており、結局のところ生存競争に負け、大きく育てることができず、失敗に終わった。

その後、岩手県の漆畑の脇から出ていた苗を譲り受け、今度は畑の隅に植えた。環境が良すぎるためか初めのころは一年で二メートル近くも成長し、台風で途中から折れてしまう苗も出た。

木が大きくなると目立つことから、周りの人に迷惑がかかるから早く切つてくれと妻には再三、言われながらも漆が採取できるころまで育った。

採取するための道具、そして方法などインターネットを介して調べ電話などしてみても、なかなか埒が明かず、そうこうしているうちに、運よく菅木呂の会に巡り会い、本問氏の力添えで道具を調達することができた。（その当時、漆掻きの道具を造ることのできる唯一の職人さんが病気で入院していたこともあり業界では道具を調達するのに苦労をされていた。そんな中で、見も知らない小生に快く対応していただいた。）

よく、透明感とさらさらした感じで、良い漆が採取できた。

九月

九月は二、十一、十八、二十三、二十八日と五回採取、乾きも早く量的にも良好であった。

ただ、雨が多く、その後に採取したものは水分量が多いように思えた。

十月

十月は二、六、二十三、二十八日の四回採取した。

二日、六日は中三日空けて採取した結果、樹液の出がやや悪かった。

また、二十三日頃から葉が落ち始め、樹液の色も透明感が薄れ乳白色となり、乾きも極端に悪くなってきた。

十一月

十一月は、一、七、十二、十七、二十二、二十八日と六回採取した。

一日は、まずまずの採取量であった。木の上部の方



次は、どのように採取するかで、愛知県の方では指導をしていただけの人材もなく、相談している中で浄法寺の方で漆掻き技術伝承者の養成を行っているので、参加しないかとの話を頂き、短期の養成を受けることにした。期間は約一週間、浄法寺に植栽されている漆の掻き方を基本から教育を受けることができた。

二 漆掻き作業メモ

仕事も辞め、ようやく自由の身になったことから、五本ある漆の木から樹液を採取することにした。掻き始めが六月頃からと聞いていたので、そろそろ始めようかと思つたものの、さて何を目安にしたらいかが分らず初めから戸惑うことになった。早速、本問氏の紹介で息子さんに電話をして確認をしたところ漆の花が咲いてから掻き出すとのことだった。

六月

当地ではすでに花は咲き終わり実が出来ているのではないかと、指導を受けたように、六月七日、早朝、樹木の周りの雑草などを整理し、初めて、木に掻き傷を五か所二面、計十か所に入れる。一本の木の一カ所から漆が滲み出てきたもののその他の傷跡からは漆は出てこなかった。五日空け十三日に二度目の漆を掻く、漆の出は良くない。樹液が固まるのは早い。雨降りの日が多く八日間空けた二十二日に

は出が悪く、下の幹が太い所の方が出が良い。しかし、そうしたところは、前回傷つけたところが完全に乾ききつておらず、回復に手間取っていることが伺える。七日は、葉は枯れ落ち、場所により樹液の出が大きく異なってきた。それに採取する空間が無くなり、最終時期が来たようである。

十二日は、傷を付けるところもなくなり、空きの有るところを傷つけ採取、量も減少してきた。

十七、二十二、二十八日については、傷の付けてないところを探し、採取。

根元に近い所が比較的多く出た。樹液は乳白色が強くなり乾きも一段と悪くなる。

十二月

十二月七日は最後の採取で出は悪かった。

年の瀬を迎え、二十日根元から伐採をする。切り口からは少量の漆の樹液が染み出てきたが採取する気持ちにはなれなかった。木の上部の枝を切り、処分し易いようにした。切り口からは、ほとんど樹液は出てこなかった。



実施、樹液の出るところが少し多くなる。

五日空け二十八日四回目の採取、前回より出が良く、水のように粘りがなく透明度が高い。更には、乾きが早く直ぐに黒く変色してしまう。

これまでの漆は採取量が少ない事もあり、サラップで覆つても中まで乾いてしまい、漆としてまともに使うことができなかった。

七月

五日空け、七月四日に五回目を採取、これまでの経験から、極めて早く乾燥することから十年前に購入して残っている生黒目の中に混入した。樹液の出は良くなったものの採取場所により結構むらがある。

六日空け十二日に樹液を採取、六回目になり全体に出が良くなってきた。今回も古い漆に混ざる。八日空け二十日七回目の採取、樹液の出は良くなってきた。二方、一本の木が少し弱ってきたようで、採取を取りやめることにした。

七月に入ったことから三日から四日空けて採取との指導を受けたけれど実際には思うように行かないもので、雨であったり、所要が出来たりで予定通りに進められない。

五日空け二十六日に採取。

八月

十日空け六日に採取、五日空け十二日、五日空け十八日、四日空け二十三日と、この間は樹液の出も

三 漆掻きのシーズンを終えて

畑に植栽して、十六年ぐらいが経過した。もう少し早く採取をしたかったが、仕事との関係で、この時期となった。漆掻き職人は一本の木から約二〇〇グラム採取できると聞いているけれど、一〇〇グラムも採取できなかった。素人だからなのか、それとも一度だけでなく樹液が出てくるたびに複数回、傷跡をへらでなぞったからなのか、又は気候、風土が適さないからなのか。シーズンの前半は雨の日が多く、採取予定を立てづらかった。又、後半は長期旅行もあり、空白期間が入ることになった。この半年間で学んだことは、漆掻きは根気の要る仕事で、職業としている方の苦労を少しではあるけれど、知り得たのではと思っている。又、日本産の漆が中国産に比べて高価であることも理解できた。

採取した漆は乾きもよく、堅牢で透明度が高く、輝きが優しく感じられる。又十月以降に採取したものはねっとりとしておりやや硬さがあるが、伸びもよく見た目以上に使ってみると透明感があり中国産の漆とは随分と違うように思えた。

経済的合理主義が最優先される現代社会で、高価となってしまう漆の消費拡大、若しくは維持を確保するためにはどのような方策があるのだろうか。

最終消費者は、堅牢で、使いやすく、持っていることに喜びを感じられる物を求めていると思う。

素人ではあるけれど少しでもこうした期待に応えられる作品を作りたいとこれまで以上に思う昨今です。

【2016年度事業予定】

- 5月22日 総会
6月～12月 漆液の仕分け・頒布
漆掻き道具の製作と記録
9月10日、11日 クロメ会
9月17日～25日 壺木呂の会展（鎌倉市東慶寺）
漆アカデミー（漆サミットから改称）を後援・参加

【お知らせ】

● クロメ会

日程／2016年9月10日(土)、11日(日)

一昨年に続き国立歴史民俗博物館准教授の工藤雄一郎先生の指導で、「縄文人の漆掻きの再現-II」を行います。参加者の皆様方に縄文人と同じように黒曜石のナイフで、傷を付けて頂き漆が滲み出る様子を体験して頂きたいと思います。

また、早稲田大学・昭和女子大学非常勤講師の佐々木由香先生に「縄文人とウルシの関わり」についての講演をして頂きます。

又いつものように漆の木で草木染めのイベントも行います。

《参加希望の方は同封のFAX申込用紙にて早めにお申し込み下さい》

● 東慶寺(北鎌倉)での展覧会 日程／2016年9月17日(土)～25日(日)

東慶寺で初めての壺木呂の会展を行います。日本産漆による作品展と同時に月見の茶会の時期に合わせて多くの皆様へ、会の活動と日本産漆の現状を理解頂く講演やワークショップも併せて行いたいと考えています。



会報
第12号／2016年4月発行

NPO法人 壺木呂の会事務局

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 2-27-3

Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147

<http://1kiro.jp/> ☒ nihonsan@1kiro.jp